

平成16年度配分 研究成果の概要

研究名	口碑伝承・民俗芸能と民間信仰の日中比較研究				
配分を受けた 特別研究費	文化政策学部長特別研究費 518 千円				
研究者氏名 (代表者)	学部名	学科名	職	氏 名	共同研究の 場合の分担
	文化政策	国際文化	教授	須田 悦生	単独
共同 研究 者					
発表の方法 (予定で可)	1 紀 要			号 数	第 号 (年 月発行)
	2 学会等での発表 学会等名： 比較民俗学会（於愛知大学） 古代中世的祭祀芸能に於ける王の舞の位置			発表日	平成 16 年 10 月 30 日
	3 その他 発表の方法： 「比較民俗学会報」第25巻第3号 「昆明・西山の道観と仏寺から」			発表日	平成 17 年 1 月 31 日

注：配分を受けた翌年度の6月末までに提出

(研究の目的等)

民俗芸能は民俗宗教や民間信仰、口承伝承といった表には現れにくい民俗的心意によって支えられていることが多い。日本国内各地において多様な展開を示す芸能現象をフィールドワーキングで現地調査してきた申請者は、中国、とりわけ日本との文化的民俗的つながりの深さが指摘される雲南省少数民族の祭祀や芸能、民俗を調査することで、日本の古代芸能文化の発生と展開について示唆を得られるのではないかと、現地でしか読めない芸能資料の収集が図れるのではないかと意図からこのような研究を試みることにした。

(研究の実施方法等)

2004年8月17日～19日に、雲南省怒江自治州六庫鎮で行われた、「第3回中日民俗文化国際シンポジウム—口承文学と民間信仰—」に参加し、研究発表を行った。タイトルは「口承文学と民俗芸能」とし、日本の平安時代から伝承されている古代芸能(王の舞)が今も地方の祭祀芸能として機能しているさまを報告し、そこには多くの伝承や民俗信仰に根ざした儀礼空間が形成されているとした。これに促されて中国人研究者から雲南省四川省の山村地帯には「王の舞」類似の芸能があること、信仰的な側面が強いことなどが指摘された。日本の例を示して十分承知していない中国少数民族の事例を教示してもらいという意図は実現されたと言える。

ついで、雲南大学少数民族学院教官の案内で怒江に沿ってマイクロバスで北へ900キロ通り、チベット自治区境界まで行った。その地、丙中落の集落にてチベット族の管楽器と太鼓の演奏による輪舞を見学した。チベット仏教の信仰が根底にある舞で、山と仏への感謝が込められていると説明されたが、芸能は「念仏踊り」系のあるものに共通するものがあるようであった。フィールドワークにより研究の実施は何カ所にも及び、具体例は省略に従うが、後1カ所六庫鎮新建村というビルマ国境地帯の村で見た、「刀梯火海」の民俗行事は、芸能ではなかったが、刀の刃の梯子をよじ登り、炭火の上を走る荒行であり、これは山伏修験者の火渡り刀渡りの儀礼にまさにおなじい。かれらリス族は2月末の月のないときに行うというが、以前は新年予祝行事としての意味があったという。日本の小正月の行事との関連も視野に入れる必要があると考えられた。

このように前半は学会での発表、後半は多くをフィールドワーキングに費やして、実地に詳しく触れ、現地の方々からは聞き取り調査を行った。ただし、時間が限定されていることと、少数民族の言語に通ずる中国人が少ないのとで十分とは言えなかったが、一定の予定調査は終えることが出来た。

(得られた成果等)

上記に重複するが、思いがけず、学会発表の折りに中国人から日本の古代芸能と非常によく似た芸能が存すること(これはまだ日本には報告されていない)が教示されたので、これを基に近い将来当該地方に赴き、実地調査を行いたい。伝承方法、宗教儀礼との関係、そして日本の古代芸能とはどこが類似しており、何が異なるのかなどを詳しく検証するつもりである。今般の特別研究はこのような実地調査をする「鍵」が与えられたという点で、大変有益であったと言える。

また、少数民族のフィールド調査はまだまだ十分ではないのでこのたび見学したチベット族、リス族の村を再訪してこの調査の続きを行いたいと思う。総じて言えば、何をどこで、どう調査すればいいのかがかなりはっきりしたということが、大きな成果である。これからの中国少数民族研究の「とっかかり」ができたわけである。